

参 加 記

全国大学史資料協議会西日本部会二〇一四年度第二回研究会に参加して

井上 美香子

はじめに

二〇一四年七月八日(火)～七月九日(水)、広島大学(東広島キャンパス)にて開催された全国大学史資料協議会西日本部会二〇一四年度第二回研究会に参加した。第一日目は、公開パネルディスカッション「これからの大学文書館」として、基調講演「大学文書館像の再構築―広島大学文書館一〇年の歩みを通じて―」(講師・小池聖一 広島大学文書館長)、パネルディスカッション「これからの大学文書館」(パネリスト・大濱徹也 筑波大学名誉教授、西口忠一 桃山学院史料室、武田知己 大東文化大学教授、司会・小池聖一 広島大学文書館長)、情報交換会が開催された。また、第二日目には、広島大学文書館施設見学会が催された。

二日間ともに、非常に充実した内容で、広島大学文書館をはじめ、諸大学文書館の取り組みとその最前線を知ることが出来た。その意味で、まさに、「これからの大学文書館」について考えさせられる研究会であったと思う。以下、研究会に参加した感想を自由に述べたいと思う。

充実した二日間

研究会第一日目は、広島大学学士会館レセプションホールにて、基調講演・パネルディスカッションが開催された。

基調講演「大学文書館像の再構築―広島大学文書館の歩みを通じて―」では、小池聖一氏より、広島大学文書館のこれまでの一〇年間の歩みと現在の取り組みに関するご講演があった。ここでは、法人文書の一元的管理を担う機関アーカイブスの機能について説明があり、研究・教育・地域貢献等との連携によるトータルアーカイブスの構築が課題であることが報告された。また、パネルディスカッション「これからの大学文書館」では、大濱徹也氏、西口忠一氏、武田知己氏から、学内文書・史料収集の現状と大学文書館の構成員に必要な能力等、それぞれの文書館が直面してきた問題とそこから導きだされた今後の課題をめぐって議論がなされた。基調講演およびパネルディスカッションを通して、過去の史資料の収集・所蔵だけにとどまらず、組織や機関の活性化を促すという大学文書館の新たな役割が提言された。

特に興味深かったのは、「今」を残すことで、大学文書館が組織・

機関の政策的立案基盤の提供ーシンクタンク機能ーを担っていくという提案である。ここに、大学文書館の新たな姿を見たような気がした。大学文書館が秘める可能性を想像し、わくわくしながら基調講演およびパネルディスカッションを拝聴した。

夕方より開催された情報交換会では、普段なかなかお話しする機会がない方々とお会いし、有意義な時間を過ごすことができた。気軽に話ができる雰囲気は、本協議会の魅力の一つであるように思う。

研究会第二日目は、広島大学文書館施設見学会が開催された。見学会は、A班とB班の二つに分かれ、A班は小宮山道夫氏（広島大学文書館准教授）、B班は石田雅春氏（広島大学文書館助教）に案内して頂いた。

私はB班であったが、はじめに、公文書室、公文書分室を案内して頂いた。公文書室は大学の公的記録類（これまでの行政文書と法人化以降の法人文書）を所蔵している。書庫内の見学では、所蔵史料の紹介の他、史資料の保存のために書庫内の環境整備で注意している点について丁寧な説明を頂いた。特に、もともと書庫ではない場所を書庫として利用する際に直面した史料の保存環境上の問題とその対策方法等、実践的な取り組みについて詳しく説明して頂いた。書庫の環境整備の実践について説明を受ける中で、史料の燻蒸の難しさが文書館関係者の共通の課題であることも分かった。抱えている課題を共有化し、それぞれの実践例や失敗例、成功例について情報交換することができたことは非常に有益であった。

また、大学本部と文書館とがどのように協力・連携しながら大学の

公的記録類を収集・管理しているのか、そのシステムの構築や運営方法等に至るまで詳細かつ丁寧に説明して頂き、とても勉強になった。

次に、大学史資料室を案内して頂いた。大学史資料室は、大学関係者の個人史料や広島大学の沿革に関する記録等を所蔵している。初代学長森戸辰男の関係文書で構成される森戸辰男記念文庫、平和学術文庫、広島大学出身の作家梶山季之を記念した梶山季之文庫等の文庫をはじめ、広島大学の沿革に関する記録等を所蔵する書庫を案内して頂いた。いずれも非常に興味深く貴重な史料を拝見することができた。

特に、梶山季之文庫では、文書史料以外のモノ資料の保存をどのようにするのか、所蔵するそれぞれのモノに対する良好な保存環境と場所の確保などが一つの課題であるとの説明があった。

文書史料以外のモノ資料の寄贈を受けた場合、その保管をどうするのか、所蔵場所の確保や受け入れの判断基準などは大きな課題になってくるものと思われる。九州大学は現在、キャンパス移転を進めている。今後、移転の進行に伴い、看板等のモノ資料が寄贈されることが予想される。その保存方法や場所の確保が近い将来の問題となることに改めて気付かされた。

本見学会では、朝一〇時に集合し一一時三〇分までの一時間半、広島大学文書館内を案内して頂いたのであるが、とても充実した見学会であった。一時間半という時間があつという間に過ぎてしまったのはい言うまでもない。

広島大学文書館の所蔵史料の紹介は勿論、同文書館のこれまでの取り組みや実践について、とても詳しく丁寧に説明して頂いた。参加者

からの数多くの質問についても、丁寧に答えて頂き、有意義な時間を過ごすことが出来た。

おわりに

本研究会では、「これからの大学文書館」について、一日目のパネルディスカッションと二日目の広島大学文書館施設見学会を通して、議論と実践との両側面から検討することができた。大学文書館が有する可能性をどのように拓いていくのかについて、参加者それぞれが改めて考えさせられた研究会であったと思う。

最後に、このような貴重な機会を得ることができたことについて、ご尽力頂いた関係者の方々には、心から御礼申し上げます。あの充実した二日間は、関係者の皆様のご尽力無しにはありえなかつたと思う。限られた時間のなか、盛りだくさんの内容をご用意して頂いて本当にありがとうございます。

(いのうえ みかこ・九州大学大学文書館百年史編集室)

本稿は、平成二六(二〇一四)年七月八日(火)に開催した広島大学文書館設立一〇周年記念公開パネルディスカッション「これからの大学文書館」(於広島大学学士会館レセプションホール(東広島キャンパス))での講演・パネルディスカッションの内容を文章化したものです。

当日の録音テープをもとに起こした文章を、来賓・講演者・パネリスト・司会者に確認いただきました。内容の重複や言い改め、余談の削除といった若干の修正を加えてありますが、内容的には当日の講演と異なるところはございません。

お忙しいなか遠路お越し頂きご祝辞を賜りました来賓の寺田稔氏、加藤丈夫氏、八津川和義氏、意義深いパネルディスカッションを展開してくださった大濱徹也氏、西口忠氏、武田知己氏、当館顧問として閉会あいさつをしてくださいました平岡敬氏、参加記をご寄稿くださいました井上美香子氏にお礼を申し上げます。そして平日にもかかわらず会場までお越し頂いた多数の参加者の皆さまと本学教職員の方々に改めてお礼申し上げます。

(広島大学文書館)